

「静夜思」(牀前月光を見る) 李白

「静かな夜」

AKY訳

寢室(ねま)にさす

月のひかりの明かるくて

霜かと銀光(しろい)庭のつち

仰げば遙か山影に

故郷(くに)が想われ

枕(まくら)つめる

(原詩)

「静夜思」

李白

牀前看月光

疑是地上霜

挙頭望山月

低頭思故郷

(読下し文)

「静かな夜の思い」

李白

牀前(しょうぜん)月光(げっこう)を看(み)る

疑(う)うらくは是(こゝ)れ地上(ちじやう)の霜(しも)かと

頭(こうご)を挙(あ)げて山(さん)月(げつ)を望(のぞ)み

頭(こうご)を低(ひ)たれて故郷(こきやう)を思(おも)う

【参考】他の方々の訳詩】

「静夜思」

潜魚庵訳

子マノ内カラ月影ヲミテ
庭ニ落ちタル霜カトオモタ
山ノヲ月ヲアオノキ見レバ
国ノ妻子ガオモワレル

この詩には、他に松下緑さん、土岐善磨さんの訳があります。

「ツキヌオモイハ故郷ノコト」

松下緑訳

霜カトマゴウ月アカリ
旅ノマクラヲ照ラスカナ
マドノムコウハ山ノ月
ツキヌ思イハ故郷(くに)ノコト

井伏鱒二訳

ネドコニユクトキイイ月ガデテ
ニハハマツシロ霜カトミエタ
月ノヒカリヲミテイルト
ヒトリ妻子ニアタマガサガル
(昭和十年二月、随筆「中島健蔵に」)

井伏鱒二訳

ネマノウチカラフト気ガツケバ
霜カトオモフイイ月アカリ
ノキバノ月ヲミルニツケ
ザイシヨノコトガ気ニカカル
(昭和十二年「厄除け詩集」)

「寝台の辺りに差し込む月の光、あまりの明るさに窓の外を見ると庭は土が白く光つてまるで霜が降りたようだ。顔をあげて、さら遠くの山にかかる月を仰ぎみているうちに、遠く離れた故郷のことが偲ばれて、自然と、うな垂れてしまう」。寝室、庭、遠い山月と、だんだん遠くの眺めに誘われ、そのうちに、はるか遠くのふるさとが思い出されてしまう。

井伏さんの訳詩は、昭和十二年厄除け詩集のなかに掲載されているのですが、昭和一〇年の随筆「中島健蔵へ」の中でもこの詩の別訳があります。大岡信さんによると昭和八年に書かれた井伏さんの「田園記」という随筆には、「亡父の遺品の中から発見された」として一〇編の訳詩が掲載されているが、これらは、「芭蕉翁五世孫 石州在潜魚庵稿艸」と奥付に書かれた木版本「白挽科」にある訳詩を下敷きに行っているというこゝとです(厄除け詩集中、大岡信「こんこんでやれ」)。

潜魚庵とは、江戸時代石州(島根県太田)の俳人中島魚坊(一七二五〜一七九三)さんのこととす。

この「静夜思」の訳は「田園記」には、掲載されては、いないものですが、潜魚庵さんの訳と井伏さんの二つの訳とが少しずつ変えられている様子がわかります。